バードトーク

夢遊星人

くるえるストーリーズ

バードトーク
――鳥のはなし

夢遊星人　作

「よう、機嫌はどうだい」
ある朝、セキセイ・インコの籠の前で呟いたら、意外なことに返事が返ってきた。
「見れば判るだろ」
なるほど、不機嫌そうな面をしている。
「君がしゃべるとは思わなかったよ」
「これまでかったるくて、しゃべる気がしなかっただけさ」
鳥はすまして言った。まるで、何でもないことさ、と言いたげな顔だ。
「変だね、鳥がしゃべるなんて」
私はふと思い返して言った。
「なにが変だい、人間だってしゃべるじゃないか。おれが変なら、人間だって皆変だ」
そう言われてみれば、人間がしゃべるのも変な気がする。いつもしゃべりつけていて変に思わないが、考えてみればしゃべるなんて変だ。おたがい変なのだから、鳥がしゃべるのだけを変に思うのは、片手落ちだ。
「で、どうしてまたしゃべる気になったんだい」
「あんたがつまらんことを毎日訊くから、ついつられてしまったのだ。本当ならおれは、こんなおしゃべりはしないところだが」
たしかに、これまでむっつりした、愛想のない鳥だった。友人から一週間前に貰ってきたのだが、特別な鳥だということは聞いていない。オスが一羽はみだしてしまったので、私に籠ごとおしつけたのだ。くすんだ緑色の、あまりさえない見ばえのセキセイ・インコだった。
よくあるように、人が近づくと暴れる臆病な鳥ではなく、一羽ぽつねんと止まり木の端に坐って――どうして真ん中に止まらないのだろう――囀るでもなく、跳ねまわるでもなく、ひねもす羽虫かなにかを退治しながら、物思いにふけっているような偏屈者だった。人間を恐れることがない。からかい半分に、指などを籠の金網の間にさしこんだりすると、最初は知らん顔をしている。そのうち、見ているとだんだん頭の毛が逆立ってきて、眼の虹彩がすぼんだり広がったりしてくる。怒っているのである。それでもなお指をひっこめないと、猛烈な勢いで、とがった嘴が指を襲ってくる。鋭い針でさされたように、血がにじんでくる。
この最初の血の洗礼を受けてからは、私はからかうのをやめて、専らながめるだけに甘んじるこ

とにした。部屋の中にどんな小さなものでも、別の生きものが息づいているという意識は、私のよどんだ生活にさわやかな効果を及ぼした。朝起きると、すぐ眼がそちらへ行く。会社から戻ると、がらんとした部屋の中の鳥籠に、ぽつねんと鎮座している生きものが、この部屋の真の主のように思われる。ほとんど囀らないのは、どういうわけだろうと気になった。しかし囀りはじめたら、かえってその騒々しさに、私はいっぺんに嫌気がさしてしまったかもしれない。

ある日、友人に会ったとき、その囀らない理由がわかった。前にはこのセキセイは独りものではなかった。ある日、不注意に庭に鳥かごを出し放しにしておいたところ、ドラ猫に襲われて、愛妻は食われてしまった。オスの方は、猫の注意が愛妻に向かっている間に、その腕の下をくぐって籠の外にのがれ、命びろいした。あとでしょんぼり垣根に止まっているのを見つけて、籠にもどしたが、それ以来、このオスは囀らないのだそうである。もともとみたくれの悪い鳥だったので、愛妻のおかげで友人の家にいつけたのが、いよいよ他の鳥の間で目立たなくなり、私の所へやっかい払いされた次第であった。

「しかし君がしゃべれるとなれば、私も話し相手ができて嬉しいよ」

私はもみ手をしながら言った。＜見世物＞という考えがチラと浮かんだ。

「そうは問屋がおろすかい」

私の考えを見透かしたようなことを言う。

「おれは人のおもちゃにされるのがたまんねえ。そんなくらいなら絶食してやる」

「話し相手と言ったんだよ。何も君をおもちゃと思ってるわけじゃない。なんなら友人ということでもいい。鳥と人間の友人なんてのはちょっと聞いたことがないが、まあ、ここに人類と鳥類の最初のコミュニケーションが開けたということじゃないかな」

「コミュニケーションかなんか知らないが、人間の口のうまいのにはあきれるよ。あんたはおれがしゃべれることを知って、定めし金儲けでも企んでいるにちがいないんだ。しゃべってしまったのはおれの失敗だけれども、これ以上もうあんたの玩具になったり、金儲けの道具になったりはしないよ。なんならもうエサをくれなくてもいいんだぜ」

「どうしてそんなスネた考え方をするんだい、君は。私たちは友人になろうというんだ。私は君を飼っているのではなく、君も私に飼われているのではない。ただ、友人として私の部屋に寄食している、と思ってくれればいいんだ。それは最初は君をからかったことがあったかもしれない。君を一介のペットとしか思わなかったかもしれない。それは君がただの鳥だと思ったからで・・・」

セキセイ・インコはプイと横を向いて、軽蔑的な流し目を私にくれた。

「ただの鳥だからどうだって言うんだ。だいたい人間は生意気だよ。人間の真似でもしないと、鳥を鳥として認めようとしない。なんならおまえさんが鳥の真似でもしてみるかい。囀ってみるかい。飛んでみるかい。そしたらおいらもあんたを友人として認めてやるよ」

私はここは相手を怒らせてはまずいと思った。敵の挑発をかわすつもりで、

「君もだいぶきつい皮肉を言うね」

「鳥のくせにといいたいんだろ」

「いや、その鳥、人間という立場をひとつ改めようじゃないか。私も人間たることを主張しない、君も鳥であることをひとまずおいてもらおう。そしてお互い裸で、つまりね、腹をさぐり合うことをやめて、すなおに話を進めようじゃないか」
「ふん、すると何かね、おいらの羽をむしって、焼き鳥にしようという寸法かい」
「とんでもない、君のような貴重な鳥を。君は私の大事なお客さんだ。世界広しといえども・・・」
「それで、どうなんだ、鳥の真似をしてみるのかい、みないのかい」
「それはひとまず・・・」
「つべこべぬかさず、囀ってみろ、飛んでみろ」
私は初めてムッとした。インコの高慢そうにもたげた首を、二回転半ひねってやりたい気がした。
「君はなんて言葉づかいがキタナいんだ。きっと前の飼い主のところで覚えたに違いない。あそこは夫婦仲が悪いからな」
「おれの言葉の悪いのは、生まれつきだい」
「生まれつき君は言葉をしゃべるのかい」
「べらぼうめ」
「まあ、いいや。とにかく、君と話を通じることができたんだから。ところで君はいつも不機嫌そうだが、何か私にしてもらいたいことはないかね。たとえば不足なものとか・・・」
「ないね。余計なお世話だよ。おっと、ひとつだけあった。それはな、もう話しかけないでくれよ」
セキセイ・インコはそう言うと、翼の下に首をつっこみ、羽虫を探しはじめた。

「もう少し話してくれないかな。この一週間、私の振舞いを黙って観察していたんだろう。君に見られてるなんて、少しも考えなかったよ」
鳥は翼から頭をぬき、胸を嘴でほじくっている。
「おい、君、もう言葉を忘れちゃったのかい」
鳥は頭が痒いのか、籠の金網に器用にこすりつけている。
「君のおかげで、今朝は遅刻だよ。最後に一言、ウンとかスンとかいってくれないかなあ」
鳥は近づけた私の顔の前で、体中の羽を逆立たせて、ブルンとひと振るいした。それから網を伝ってエサ容れに下り、悠然と穀粒をついばみはじめた。

それから数日間、鳥はおし黙っていた。なんの変哲もない、くすんだ緑のセキセイ・インコだ。この鳥と話をしたなんて、きっと夢でも見ていたんだろう。そう自分で自分を笑ったが、それでもあの朝から、インコの小さくても、意外と鋭い眼で、一挙手一投足を見られているような気がしてならない。いや、むしろそういう関心のこもった眼を、もう一度、鳥に見いだしたいという期待のせいだったろう。
すると、次の日曜日、エサをつぎ足そうと金網の出入り口をあけたとき、覚えのある声が響い

てきた。
「おい、いつまでおれを、こんな狭いところに閉じこめておくつもりだ」
鋭い眼が、私をじっと見ている。
「閉じこめておくって、君が出たいと言えば、いつでも出してあげるよ」
「いちいち断わらなきゃならねえのかよ。だいたい、そんな開け閉てするのがついてるのが気にいらねえ。一体どんな了見で、そんなものをつけやがるんだ」
「そういうなら、さっそく外すことにするよ」
「だいたい、おれたちを閉じこめるだけで、ほかに何の用もない代物じゃないか。おれたちが危険にさらされたからって、そいつが守ってくれたかい。反対に、おれたちが逃げなきゃならないときに、おれたちの道をふさいでしまうじゃないか。まったく、ない方がせいせいする」
「君の奥さんのことだったら、本当に同情するよ」
「あんたなんどに、同情される筋あいじゃねえや」
「美人だったかい」
「美人だって、チョッ、べらぼうめ」
まったく取りつくシマのないというのはこのことだ。

「さあ、戸口をくくりつけたから、いつでも出てきたまえ」
インコはするすると身軽に金網を伝って、出入り口に止まった。飛び立つべきかどうか、しばらく迷っている。手を出して、その上に乗るように勧めると、馬鹿にしたように一息に私の肩をかすめて飛び上がった。部屋の中を愉快そうに、くるくる二、三周した。それから、電灯のヒモにぶら下がった。
「どうだい、広いところを飛び回る感じは」
「悪くねえな」
「これから、いつでも好きな時に飛び回るといいよ」
「窓が閉まってるのが気に入らねえな」
「まさか、外へ出ようというんじゃないだろうね」
「出ちゃあ悪いかね」
「出たら、もう戻って来れないかもしれない。外でエサを探すのは大変なことだよ。たいていの籠の鳥は、外へ放たれると死んでしまうというよ」
「それが余計なお世話だというんだ。おれたちの世界の言葉に、＜籠の一年より、藪の一刻＞というのがある。また＜自由か、しからずんば死を＞というのも、おれたちの世界まで聞こえている。自由と死と、おいらにどっちを選べというんだい」
「選ぶまでもないことだよ。自由の先には死が待ってるんだから」
「ふん、言ってくれるねえ。おれは、ますます外へ出たくなったよ。こんな日当りの悪い部屋に、何日も閉じこめられていたんだ。日光と風の中を、思いきり飛び回れたら、それで死んでも本望さ」
「そんなことを言わないでくれたまえ。どうしても出たいというなら、きっと戻ってくると約

束してほしい。君のことを心配して言うんだ。君が戻るまで、窓を開けっ放しにしておくから、私の部屋を見失わないように、あまり遠くまで行ってはいけないよ」
「戻ってくるか、戻ってこないか、そんなことはわからねえな。けどよ、もしかしたら戻ってきてやらあ。だけどよ、約束なんてしないぜ。そんなものは、おいらたちの世界にはないんだ」
私は窓を開けた。外は上天気だ。鳥は私の肩に舞い下りた。それからサッと青空めざして飛び立ち、一直線に、どこまでも、どこまでも、遠ざかって行き、最後に一点のゴミのように空に溶け入ってしまった。私はがっかりして、畳に腰を落とした。空の籠をながめた。そこから妙な空虚が心の中へ伝わってきた。

鳥は夜になっても戻ってこなかった。念のために窓を開けておいたが、夜中に冷えてきたので閉めた。朝方、窓ガラスに翼をこする音で目が覚めた。開けてみると、尾羽うちしおれたインコが、欄干に止まっている。ハタハタと力なく飛んで、畳に落ちた。
「おい、どうして窓を閉めたんだ。おれを殺す気か」
「まさか、朝帰りするなんてね、思わなかったよ」
私の皮肉が応えたとみえて、鳥はビッコを引きながら籠に這いのぼり、黙って餌をつつきだした。
これにこりたのか、インコはその後、戸外へ出たがらなくなったばかりか、籠から一歩も踏みだそうとはしなくなった。狭くても、籠の中がこの世で一番快適な場所であることを学んだらしい。

鳥がいつしゃべりだすかは、まったく気まぐれで、突発的だ。こちらからいくら誘っても、とぼけているのか、言葉を忘れてしまったのか、一向にのってこないと思うと、思いがけない時に、思いがけないことを口ばしりだす。ひとしきりしゃべると、またふいに興味を失って、もとのあたり前の鳥にもどる。
中に二つの魂が暮らしているようだ。一方は単純な鳥類の生に甘んじ、他方は、その無垢の状態から、突然、雷に打たれたように、人間の猥雑な精神世界へ、罵詈をまきちらしながら躍り出てくる。人間は意識の反対側の無意識界では、獣の生活を送っているという。そのデンでいけば、鳥は普段無意識でいるときは、ありのままの鳥であるが、何かのきっかけで、意識的生活を始めると、人間と同じレベルに達するらしい。

「あんたの顔を毎日見ているのも、もうあきたな」
ある時、物言う鳥はこんなことを言いだした。
「どうしてあんたには、ツマがいないんだ。まったく、その不景気な面につきあわされてる、おいらの身にもなってみろよ」
「そらあ、安月給だからね。私だって、もっと日当りのいい家へ住んで、＜三食昼寝つき＞にかしずかれたいとは思うさ。しかし、自慢じゃないが、貯金なんてこれっぽっちもないからね」
「そんなしみったれたサラリーマンのところに、おいらのような鳥様がいてやるんだ、有難く

思えよ」
　「ははあ、それはもう・・・」
　「あんたの奥方になるような女の顔が見たいものだな」
　「何年先のことになりますやら・・・鳥様には、それよりも、お仲間の姿が、おなつかしくはございませんかな」
（なんで私が、こんなへりくだったもの言いをしなければならないんだ!）
　「仲間とな」
　「はっ、なんなら新しい奥様でも」
　鳥はふと顔を横に向けた。先妻のことでも思い出したのかと思い、よく見ると、私は鳥にそんな表情があるとはこれまで気づかなかったが、その横顔はたしかに少し赤面しているようなのだ。プライドが高くて、その話を――人間風に言うと、再婚話を――自分からもちだせなくて、それとなく私の身のことのようにして、話がそこに及ぶのを期待していたらしい。
　「えへん、えへん」
　鳥はむせたような変な咳払いをして、
　「あんたが独り身をかこっているというのに、おいらだけが妻をめとるというのは、それは不公平だな」
　殊勝なことを言う。
　「なあに、君の方は金がかからないからね。友人のところへ行って、タダで貰ってくるだけさ」
　「そんな簡単なことを、これまでなぜ黙っていたんだ。おれになんぞ怨みでもあるのか」
　さきに卑下したのがしゃくらしく、見当はずれにつっかかってくる。
　「まあ、そう喧嘩腰にならなくても、めでたい話なんだから」
　「おいらは、メンクイだぞ」
　「わかってる。とびきりのやつをいただいてくるさ」
　一体、自分をどれほどの男前と思っているのか、私の人間の目で見るかぎり、小男で、衣服もくたびれて、おまけに生えかわりの時期なのか、額がかなりハゲあがっている。どうみても、異性に慕われるタイプじゃあるまい。もっとも、人間の世界の規準で、鳥の世界を測るわけにはいくまいが。

　そこで、さっそく私は友人の所へ出かけていった。幸い家にいて、私を喜んで迎えてくれた。最初から鳥の話をするのも、少し大人げない気がして、あれこれ馬鹿ばなしをしたあと、帰りぎわにやっと、思いだしたようにその話を切りだした。
　「なんだ、まだあの鳥を飼っていたのか。君のことだから、もうとっくに焼き鳥にでもしてしまったかと思っていたよ」
　友人は、半分冗談のように言った。
　「まあ、とにかく無事でいてよかった。あの鳥はワイフが特に嫌っていてね。もともと生き物は苦手なところへ、指をしたたかにつつかれたりしたもんだから、眼の敵にするようになった

のだ。庭へ籠を出しっぱなしにしたのも、猫にでも食われればいいと思ったのかもしれない。あいつが食われそこなったので、今度は君が虐待してくれるのではないかと、君にやっかい払いをさせたのも、ワイフなんだ。
　そうか、君がそんなに可愛がってくれていたなんてね。人は見かけによらんね。ぼくもかわいそうだとは思ったが、私と鳥とどっちが大事だと言われてね・・・。そうか、つがいにしたいのか。まてよ、今のところ適当なのがいないな。少し気の長い話だけれど、こいつでももってくかい」
　友人は、縁側に並んだ鳥籠の一つに手をつっこんで、ゴソゴソやっていたが、やがて手のひらに何かを握って、私の前につきだした。
　「生まれてまだ三ヶ月くらいかな」
　見るとまだ半分赤裸の、醜いかたまりが、手のひらの上でとまどったようにうごめいている。
　「羽が生えそろうまでは、みんなこんなものだよ」
　「どれくらいで大人になるんだい」
　「まあ、半年だな」

　私はそのヒナをポケットにつっこんで、家路へついた。いろいろ弁解の文句を、頭の中でめぐらせた。半年待ってみたまえ、すばらしい美人になるから。なんてったって、手つかずだよ。私は街灯の下へ来ると、ポケットから取りだしてながめてみた。なんだか顔つきが気に入らない。毛のないせいだろう。裸の腹も、いやにぶくぶくとふくれている。やたら手の中であばれ回る。
　部屋に帰って、籠の鳥を見ると、いやにすましかえっている。女一匹のために、興奮したりするのは、プライドが許さないらしい。それでも心なしか、足の爪などをみがいて、少しは身なりが気になるらしい。
　私はちょっとためらったのち、ポケットに握りしめていたヒナを籠の前へつきだし、手のひらを開いた。鳥は拳がポケットを離れるときから、じっと目で追っていたが、いよいよ手のひらが開かれた瞬間、ギョッとして凍りついたようになった。丸い眼の虹彩が狭くなったり、広くなったりした。なおもヒナを近づけると、二、三歩横すべりに、止まり木の上をよろめいた。
　「しかたがなかったんだよ、これしか貰えなかったんだ」
　鳥はおのれを取りもどしたらしく、プイと横を向いて、それからはいくら話しかけても、ヒナも、私の顔も、見ようとしなかった。もちろん言葉も、一時的なショックで忘れてしまったらしい。

　雛鳥はまだエサを食わせてやらねばならないので、余分な世話も要った。明るい所を嫌って、やたら這い回る。手の上で静かにしていられない。それでも二、三日するうちには、人間の手触りになれたとみえて、それほどあばれなくなった。それに空腹はおのずとヒナに餌をついばむことを教えて、いつのまにか自分で食べている。それは良かったが、箱の中でおとなしくしていない。すぐ這いだして、どこか部屋の隅にもぐりこんでいる。一週間目には、籠の止まり木に乗れるようになった。

まだ顔から首にかけては、ほとんど羽毛がない、下腹もすけている。何とも醜怪な姿で、棒に止まっている。未来の良人の方は、何か意地悪でもするかと思うと、意外におとなしく、幼な妻の存在にはまったく無関心でいる。一度籠に入れてやると、ヒナはすっかりそこが気に入ってしまって、ウロウロ外へ出たがることもなくなった。満足そうに、止まり木の一方の端で、べったり坐りこんでいる。

私の友人の変わった点といえば、止まり木の真ん中に止まるようになったこと、おそらく自分が主人であることを、闖入者に示すためだろう。むっつり、不機嫌そうな面構えは、相変わらずだ。

面構えといえば、この幼な妻の、最初の夜、電柱の灯りで見たあの不吉な面相は、日をへるにつれ、だんだん本物になっていくようだった。だいたい目つきが子供のくせに、不敵なところがある。あのまだ虹彩も見わかない、夢見るようにうるんだヒナ鳥のまなこではない。既に世間のアクにそまった、スレッからしのずるがしこい目つきだ。それに額にしても、鼻にしても、もしこれを人間の女に想像してみたら、とても美人になる運命になっているとは思えない。

だが、わが鳥の友に対してはどうだったろうか。最初のショックが過ぎてみると、彼はしだいに落ちつきを取り戻してきたようだった。羽が少しずつ生えそろってくるにつれて、時々チラチラと眼を彼女の方へはしらせている。もちろんまだ女としてみているのではなく、へんちくりんな同居人を、半ば馬鹿にしながら、半ば同族としての関心をいだきはじめたようだ。私は彼と何とかコミュニケーションを通じえて、感想なりと聞いてみたいと思ったが、まだ一言も引きだすことができずにいる。私への関心は、ほとんど失ってしまったようだ。あるいは怒りのあまり、わざと沈黙しているのか。

ヒナはすくすくと成長した。ひと月もすると、頭のてっぺんに黄色いうぶ毛をいく本か残して、完全に羽が生え揃った。もちろん、まだ翼は短く、尾は伸びきっていない。人間で言えば、小学一年生というところ。それが未来の花婿たる、中年のおじさんと並んでいる。

この頃から、わが友の態度が、少しずつ変わってきた。いや、むしろ未来の花嫁の本性が、早くもその片鱗を表わしはじめたというべきだろう。

彼女は当初は、止まり木の隅で小さくなっているように見えた。それがひと月もたつと、しだいに自分の棲み処になれてきて、だんだんその振るまいがあつかましくなり、日ごとに傍若無人の度を加えていった。前にはわが友が彼女の存在を無視していたように、こんどは彼女の方が、年上の彼の存在を無きがごとくに振るまっているように思われた。不思議なのは彼の態度である。

静かにエサ箱でエサをつついていると、突然彼女がエッチラオッチラ下りてきて、エサの真ん中に陣取り、食べたくもないのに一粒二粒つつく。彼は怒るかとみると、だまって止まり木に戻っていく。その止まり木でも、時々、何の理由もなく、彼女は右へ寄ったり、左へ寄ったりする。そのたびに、彼もつきあって右往左往し、時には金網にへばりつくはめになる。といって、特に抵抗するわけでもない。だまって彼女の遊戯につきあっている。

そして、ある時見ると、わが友はもと通り、止まり木の片隅に押しやられて、彼女が真ん中に

陣取っている。べったりと子供らしい坐り方で、しかしその面影には、すでに亭主を尻にしくふてぶてしさがこぼれている。彼の方は一本足で立ちながら、この扱いに少しもこたえた様子はない。どこか満足のようなものさえ浮かべている。

こういう有様で、私とわが友との間で何のコミュニケーションもないまま、数ヶ月過ぎていったある朝のことである。私と彼との間の断絶を、決定的にする出来事が起こった。私は耳なれない音の刺激で、朝の眠りを破られた。鳥を飼っていながら、これまでついぞ聞いたことのない甲高い響きだった。彼が囀っているのである。

私はすっかりあきれて――鳥の囀りにあきれるなんて変な話だが――気の狂った生き物でも見るように、わが友を見つめた。それは胸の底からしぼりだすような、痛切な囀りだった。悲しいのか、嬉しいのか、そのどちらでもあるような、しかしやはり胸にせまる、感情そのものがほとばしったような叫びだ。これこそ自然ではないか。何の虚飾も、遠慮もない、赤裸の感情。友は、わが物言う鳥は、自然に帰ったのだ。もう再び、彼と会話することはあるまい。彼と言葉によって理解を通じあうことは、二度とあるまい。

しかし、これで良いのかもしれない。彼は言葉を失ったかわりに、何かをかわりに得たのであろう。その何かは、私の人間の目から見れば、とても理想的なものとは言えない。それでも彼には十分なのだ。私の目からは、思春期の不良少女じみた相手でも、恋に狂った彼の目には、天女のように映っていよう。

小男の彼は、すでに一回り大きい彼女の気を惹こうとして、しきりに囀っている。彼女はうるさそうに、てんで相手にしようとしない。それでも彼はチャラチャラと囀りつづける。彼女が右に寄れば右に飛び、左に寄れば、機嫌とりに首を振って近づく。口移しでも出来ればもうけものだ。たいてい威嚇にあって、すごすごと引き下がる。

それでも彼女は、自分で食べるよりは面倒がないので、彼の口移しを許すようになり、ますます体重を加えていく。彼の方は心なしか、ますます貧相の度を加えていく。時々私と目をかわしても、そこに何の理解も浮かんでこない。人間などとしゃべることが、今の彼にとって一体何ほどのことがあろう。

考えてみれば、私が鳥などとしばらくの間でもしゃべったのは、同じようにひどく不自然なことであったかもしれない。私と彼とがしゃべりあえたのは、そこに何らかの共通なものがあったせいかもしれない。私もまた、かつてのわが鳥の友のように、ひどく偏屈な変わり者なのだろう。しかしまた、その偏屈のおかげで、奇妙な体験が味わえたのだとすれば、わが偏屈もまた捨てたものではなさそうだ。

（完）